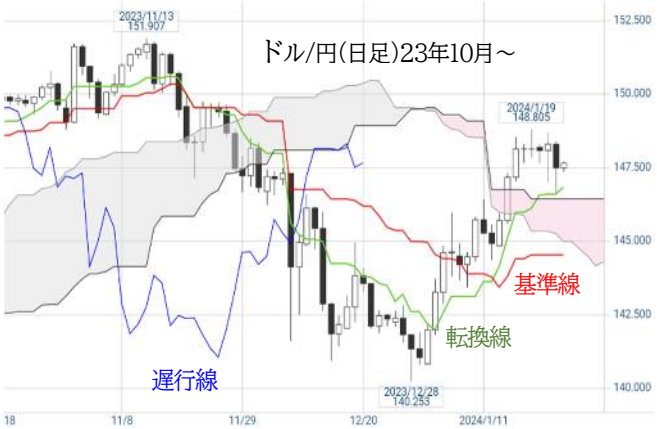
田嶋智太郎の FX レポート☆彡　　２０２４年０１月２５日更新分

■　米・日株価の「調整局面入り」に要警戒！

先に行われた日銀金融政策決定会合の結果と植田日銀総裁の会見内容を受けて、ドル／円、クロス円は一旦大きく値を下げる展開となった。

政策会合の結果がほとんど予想通りで、円売り材料の出尽くし感が市場に広がったことが一つ。また、記者会見で発せられた総裁のコメントが「マイナス金利解除に踏み切るタイミングが着実に迫って来ていることを匂わせる内容」と市場に受け止められたことも円買い材料となった。



ただドル／円に関しては、左図に見るとおり、一目均衡表の日足「雲」上限が当面の下値サポートとして意識されやすくなっている模様。そもそも、１６日に日足ロウソクが実体部分で「雲」上限を上抜けたところで、いわゆる『三役好転』の超強気シグナルが点灯する格好となっており、そう易々とは弱気に転換しないものと思われる。

それだけ、米景気の底堅さを再認識させられるようなデータが少なからず出てきていることも事実であり、昨日（２４日）発表されたＳ＆Ｐグローバルの米ＰＭＩ統計（１月の購買担当者指数）もその一つであったといえる。米国の製造業・サービス業を合わせたコンポジット（総合）ＰＭＩは７ヵ月ぶりの高水準となり、市場からは「ＦＯＭＣが金利を『より高くより長く』維持するリスクは高まった」との声も聞かれる。

ただ、さすがに「米追加利上げ」という選択肢が浮上してくることはもうないだろうし、一方で日銀が政策変更に動き出す時期もジワジワと近づいてきているわけであるから、誰もが基本的に今後のドル／円の上値余地には自ずと限りがあると考えていることだろう。

加えて、米・日株価の当面の行方も大いに気になる。米国では、足元でＳ＆Ｐ５００種指数やフィラデルフィア半導体株指数（ＳＯＸ指数）が連日のごとく史上最高値を更新してきているが、さすがに目先の高値警戒感がかなり強まっていることも否定はできない。米国のハイテク株高を受けて日本の半導体関連銘柄を中心としたハイテク株全般の人気もかつてないほどに高まっているが、やはりそろそろ上昇一服となってもおかしくない。

ポイントは、足元で日本株高が一つの円売り材料になっているということ。先週１９日の日経平均株価は前日終値比で４９７円もの上昇を見ており、これを受けて同日の東証の取引時間終了（大引け）時にドル／円は一時的にも１４８．８０円近辺（執筆時における直近高値）まで上値を試すこととなった。逆に言うと、日本株が一旦調整局面入りすると、同時にドル／円やクロス円全般も調整しやすくなるということである。

足元で、日経平均株価は予想ＰＥＲ（株価収益率）が１６倍に迫る水準となっており、ここは一旦「１６倍の壁」にぶち当たることとなっても不思議ではない。何より、米国株がひとたび弱気に転じれば、日本株にも少なからずマイナスの影響が及ぶことと思われる。

ちなみに、目下のユーロ／ドルは２００日移動平均線（２００日線）が下値をがっちり支える格好となっており、それだけ対ユーロでのドルの上値は足元で重い。むろん、本日行われる欧州中央銀行（ＥＣＢ）理事会の結果を受けた市場の反応に要注目であるが、仮にユーロ買いの動きが強まることとなれば、１４６．４０－５０円処を一つの目安にドル／円をショートするのも一法ということになろう。　　（０１月２５日　１０：１５）